「日々の理科」（第 2121 号）　2020,-4,30

「春キャベツの実験（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

キャベツも普通の植物と同じように、最初は数枚の葉から育つ。写真は、キャベツ畑の植え付け直後の苗の様子だ。大きな葉が数枚、放射状に育った頃、中心部に結球を始める。中心部には「芯」があるが、その芯は花をつける為に機能する。春に収穫を終えたキャベツ畑では、収穫されずに放置されたキャベツに「薹（とう）」が立ち、たくさんの花が咲いているのを見かけることがある。

私は、カットしていない「訳アリ春キャベツ」の内部がどうなっているのか、丸ごとむいて調べてみることにした。「４個で１００円」というのは、訳あり中の訳ありだ。要は、内部には葉は少なく、花や芯が多いということだ。内部まで葉が詰まっているキャベツは、小さくても重い。この訳ありは軽かった。きっと花だらけなのだろう。

私は、一番外側の葉から慎重にむいてみた。葉は下の葉とぴったり重ならないように、放射状に配置されている。その様子を観察するだけでも面白い。

何枚か葉をむくと、花のつぼみが現れた。恐らく中心の一番長い茎の花から咲いていくので、このつぼみは、中心の茎から分かれた、枝の先端に咲く花なのだろう。

更に葉をむき進めると、内部はものすごいことになっていた。葉はほとんどなく、花のつぼみと茎ばかりだ。「究極の訳ありキャベツ」と言える。４個で１００円なので、文句を言う人もいないだろうが、教材研究の材料としては、宝物のようなキャベツである。